



ずっと片思いしてる幼馴染に
経験あるフリをしてホテルに
誘ったら実は嫉妬されてて
初めてなのに

溺愛クンニ とくり責め

で激重感情わからされる話

「結局あたしと帰ることになっちゃったね、昴。いっぱい声かけられてたのに、勿体ないな―」

「……リコもだろ」

火照った頬に夜風が当たって気持ちがいい。

居酒屋から駅までの帰り道、幼馴染の昴（すばる）と歩きながら、私は少しだけ浮かれていた。

頼まれてセッティングした合コン。

快諾したはいいけれど合コンなんて行ったことがなくて面子の当てが中々つかず、苦し紛れ…というか、冗談で昴を誘った。

あの時は恋愛に興味のなさそうな昴がまさか「行く」とは思わなくて……驚いたし不安になったものだった。

本当は誰とも、くっついて欲しくなかったから。

「あたしはさあ、いいんだよ。頼まれて幹事やっただけだからさ」

「……頼まれて？」

「そうそう。ちょーつとまあ、ウラの事情があった合コンだったってわけ！ だから別に、ぼっちでよかったの」

昔から、ずっと昴のことが好きだった。

だから、やっぱり嬉しい。昴が誰も選ばなかったこと。しょうがないなあ、あたしと帰る？ という言葉に、素直に頷いてくれたこと。

「なんだ……そうだったのかよ」

「えー？ 何ガツカリしてんの？」

「ガツカリしてねえよ。なんつーか……リコが合コンなんてやんの、初めてだったから」

「そんな意外だった？ あたしだってさあ、彼氏欲しくはあるんだよー？」

「……ふーん」

気のない返事をされてこちらの方がガツカリする。昴はいつもこうだ。

全然興味無いですーみたいな雰囲気で、いつも話が終わってしまう。

だから。

私は今日、一世一代の大博打を打つことにした。

——ずっと片思いしてる幼馴染に経験あるフリをしてホテルに誘ったら実は嫉妬されてて初めてなのに溺愛クンニとクリ責めで激重感情わからされる話——

「……昂はさあ、欲しくないの？ 彼女。作ったことないでしょ？」

人気のない道をわざと通る。スポーツや音楽にしか興味がない昂は、繁華街の道なんて分からなくて、素直に私についてくるだけだ。

「……普通に、欲しいけど」

「ふーん？ じゃあ、今日の女の子たちは微妙だったんだ」

「微妙、ってか」

「でもさ、いざ彼女出来た時にリードできなかったら、困るかもしれないよ？」

路地裏の突き当たり。ここを右に曲がると駄だけれど、左に曲がると——ラブホテルがある。

私は振り向いて、昴に向き直った。

昴、背高くなったなあ。

小学生の頃はクラスで一番足が早くて、女子からたくさんチョコを貰っていたんだっけ。中高の頃は野球部でピッチャー頑張ってたよなあ。大学になって髪を伸ばして、服のセンスも良くなって……それで、今は見違えるくらいカッコよくなった。

でも、どんな時も私はずっと、昴のことが好きだった。

「だからさ——……あたしと、行く？ ホテル」

心臓がばくばくする。

余裕のあるお姉さんみたいな表情を、できているだろうか。

いつもあまり表情の変わらない昴が目を見開く。一歩近づかれて小さく肩が震えた。…
気付かれていますように。

「……なんだよ、それ。どういうことだよ」

「あたしで捨てればいいじゃん、童貞。それでも経験あるしさ、教えてあげられ——わっ、
なになに?!」

ぐっと顔が近付いてくる。いつも鋭い目つきが余計に鋭くなっていて、不機嫌全開だ。
お、怒らせた……??

「他のヤツにも言ってるのかよ、そんなこと」

「えっ!?! いや、言ってるわけないでしょ。昴にだけ、特別だよ?」

流石にそんなとんでもない女だと思われたら困る。

昴は眉根を寄せているけれど、さっきより不機嫌オーラ全開、ではなくなった。

「……………なら、行く」

「え……え、ほ、ホントに？」

「なに、冗談だったわけ？」

「違うけど……な、なあんだ、びっくりしたく怒ったかと思ったじゃん！　じゃあ決まりねっ、お姉さんがリードしてあげよう！」

長く空いた間が気になったけれど、行く、という言葉にホっとする。昴はいつも私の誘いを全然断らないから、なんとなくイける気がしていたのだ。

同じ年だろ、と小さく突っ込んでいる昴の腕を掴んで左に曲がる。やっぱりやめようとか言われたら心が折れてしまいそうだから早足で。

「まあ……捨てるだけ、ね？　明日にはあたしも忘れて、次の合コンセッティングするし。次はいい女の子いるかもしれないから、その時はリードしてあげるんだよ？」

誰に告白されても、チョコを貰っても、興味がなさそうだった昴。どう考えても長い付

き合いの私なんか眼中にないだろう。

ならばせめて、身体だけ、一回だけでもいいと思った。

昂の気持ちに負担をかけないように、初めてを捧げるなんて重いだろうから、経験あるフリをして。

こんな考えが重いつていうのもわかってる。

けれど一途にずっと想い続けてきた見返りを、ひとつくらいは貰いたかったのだ。

(……とか思ってたここまで来ちゃったけど、ど、どうしょ……)

小奇麗なラブホテルの一室。友達と女子会で泊まったことがあるので受付はスムーズに済ませることができた。

昴がシャワーを浴びてている音を聞きながら、鳴り止まない心臓を抑える。

ちゃんと準備もした。ゴムも買ってあるし、身体の処理もしたし、一応……えっちな漫画とか読んで、勉強もしてきた。

(でも初めて、なんだよなあ……バレないように、うまくやんなきゃ……っ)

昴からは風呂一緒に入らねえの、と言われた。そんなの夢みたいだけど恥ずかしすぎるし、何より心と身体の準備があるのだ。

——急がないと。

私はそそくさと鞆から秘密兵器を取り出した。

ㇿ潤滑ゼリー　ベリー風味ㇿ

勉強したときに、こういうものがあるともし濡れなくても痛くないって書いてあるのを見て買ってみたものだ。

これを先に仕込んでいれば、多少緊張して濡れにくくても、初めてでも入りやすいんじゃない

ないかと思う。

自分の指でちょっとだけ練習もしてきたし、きっとイケるはず。

ベッドの隅に隠れてバスローブの紐を解く。そっとパンツを下ろし、ゼリーをナカに入
れ込んでいく。

「……ん、……っ！」

ゆっくりと、前に練習したみたいに一包を全て入れ込む。

ちょっと変な感じがするんだよねあ、と思いながら吐息をつき、はだけたバスローブを
整えていると――

「リコ。何してんの？」

「わひゃっ!？」

上半身裸の昴が後ろに立っていた。

驚いて飛び跳ねる。

「ななな、なんでもない！　ちよ、ちよっと準備…っていうか早くない！？　シャワー！」
「髪洗わねえし。家出る前も浴びてきたし」

こっそりベッドの下にゼリーの袋を隠して隅から這い出すと、ベッドに座ってがしがしと濡れた首元を拭きはじめた昴の身体が目にとまった。長年スポーツをやっているだけあって引き締まっていて綺麗だ。

つい割れた腹筋を触りなくなつて、する、と手を這わせた。引き締まったそこがぴくりと震える。

「……まだ野球やってるんだっけ」

「いや、今はジムだけ」

「ふうん…それなのにこんな割れてるんだ。すごいねえ」

「……リコ、くすぐりたい」

形を確かめるように撫でると、少し恥ずかしそうに身を振る。なんだか可愛く見えて、

そのままちょっと強めに押して、ベッドに倒した。

……あ、今のは、ちょっと経験豊富なお姉さんに見えたかも。

「ふふん、じゃ、お姉さんがやさしく教えてあげるからね？」

「同年だろ、って…、…ちょ、っと、リコ」

「なに？」

「くすぐってえ、って……っおい」

たじたじな鼻も可愛いなあ、私って意外とこういうの向いてたり？　なんて思いながら、
つつ……と腹筋から下へ指を伝わせる。

「これくらいで恥ずかしがらないの。あたしたち、これからもっとすごいこと、するんだよ……？」

あ、これはかなりいい感じに経験豊富そうに見えたんじゃない？
この後は、えっと……耳とか、首とかにキスするんだっけ。漫画ではそうだったような

——と屈んだ瞬間、身体をがしっと掴まれた。

「……えっ??」

ぼすんっ、と柔らかな音と共に視界が反転する。

視界には余裕なさそうに、どこか熱っぽくこちらを見る昴がいて、一気に心臓が高鳴った。

「リコ」

「なっ、きゆうに、なに、」

「キスしたい」

鋭くて真剣な眼差し。いつもこの目に見つめられる度、ときめいてしまっただけで動けなくなる。…え？ キス、したいって言われ、た？

「き、す？ あ、あたしと……っ？」

「リコと」

「……昂は、いいの？ あたしで」

「リコがいい」

やばい、絶対顔赤くなってる。どうしよう。

しばらく視線をうろつかせたあと、おずおずと頷いた。

「いい、けど……あとで、後悔しない？」

「しない。リコ、口閉じて」

「う、うう……っ、ん、む……っ、……！」

昂の整った顔が迫ってきて思わずぎゅっと目を瞑ってしまう。と、すぐに唇に柔らかいものが触れた。

ちゅ、ちゅ、と何度か音を立てられて触れるだけのキスを交わしたあと、角度を変えて深いものへと変えられる。どうしよう、と置いていたら誘うように舌先でなぞられて……そっと、唇を開いた。

「ふあ……っ、は、っんむ……っ、す、すばる……待、…っんう……っ♡」
「リコ、もっと」

舌を絡められて、ぢゅ……っ♡ と吸われる。それだけでぞくぞくと腰が震えてきて身体がおかしい。

ぬる、ぬる、と上顎を擦られて……視界がぼやけて頭がぼーっとする。

「は……ふ……っ♡ んん、う………♡」

「……リコ、すげえエロい顔してる。キス好きなんだな」

「へ……っ？ ……あ、えっと……えへへ、まあね……！ じよ、上手じゃん、昂………！」

ぼーっとしてたらいつの間にか唇が離れてしまった。慌てて返事をしながら昂を見ると、また眉根を寄せて不機嫌そうな顔をしていた。

お世辞みたいで気に障ったかな……？ なんて思っていたら、バスローブに手をかけられる。

「リコ、脱がしていい？」

「えっ！？　す、昴が脱がすの？　そんなの自分で……っ」

「教えてくれるんだろ、俺がやんねえと意味ねえじゃん。……なあ、脱がしていい？」

もう一度唇がくっついてしまうほどの距離で尋ねられてダメなんて言えなくなる。というより、教えるってそういう意味で捉えられてたの……！！？

緊張しながら頷くと、いつものぶっきらぼうな態度からは想像もつかないほど優しい仕事で肩までバスローブを下ろされる。そのまま首筋に顔を埋めて、外させて、と言われて。何を、って聞く間もなく背中を少し持ち上げられて、ぱちん、とブラのホックを外された。

「ちょ……っ、な、なんでそんな上手に外せんのよ……！！」

「イメトレいっぱいしたし」

「ふっ……なにそれ、変なの……っわ、ひゃ……っ！　く、くすぐったいってえ……っ」

まだ隠れてはいるけれど、無防備になってしまった胸元に何回も口付けられる。くすぐったくて身を振ると、もっと強くがいい？　というようにちゅう、と吸われる。

こういうのって痕が残るんだっけ、残るといいな。そう思っていると、する、と腋の近くの膨らみを撫でられて身体が震える。ゆるゆると何度も確かめるように摩られて、言い知れない感覚が背筋を襲う。

「んう……っ、な、なに、……そんな、とこばっか……っ」

「……ここ触ると、ぴくってするから。可愛い、リコ」

じっと見つめられて恥ずかしさが募る。

見せて、と囁かれてそっとブラジャーを取られてしまった。思わず隠そうとした腕はすぐに取られてシーツに沈み込まれた。

なにも教えられてないのに、昂が上手過ぎて何も言えることがない。というか、そんな余裕もない。

「ん……、んう……っ、あっ！？♡　や、そ、それやだ……っ♡」

両手でむにゅ……っ♡ と揉みしだかれて、指に乳首が掠めて変な声が出る。

「胸触られんの、嫌い？」

「嫌い……って、いうか、……っんん、…っ」

触りたい、って言うみたいにする……♡ すり……♡ と乳首の周りをなぞられる。焦らされてるみたいで恥ずかしい。何も言えずに口を噤んでいると、ちゅ、と口付けが落ちてきた。

「なあ、リコ……言ってくれなきゃ、わかんねえよ。胸、やだ？」

「……っやじゃない……けど……！ ……っ、その……、」

こんなこと言うの、絶対余裕のあるお姉さんじゃない。けれど、昂にそう言われたら逆らえるはずもなくて。

「その、ビクってしちゃうからは……恥ずかしくて……っんむ！？♡ んん、……あ、っ♡ きゆうに、するの、だめえ……っ♡」

「恥ずかしがってるリコ、すげえ可愛い……いっぱい触らせて」

すりすり♡

くにゅくにゅくにゅ♡

小さく本音を零した途端、深い口付けと共にすりすり♡ と指の腹で乳首をこねられる。やわやわと揉まれては、次第に勃ってきてしまった乳首を摘ままれて、指腹で擦られて。

「ひっ、う、う……っ♡ も、そんなしなくて、いいってえ……っ♡」

「でもリコ、気持ちよさそう。乳首びんって硬くなってきたし、腰もびくびくしてる……」
「やつ、んっ♡ い、言わなくていいから、そんなん……ひい、！？♡ あっ、だめ、それ……だ、めええっ♡」

ちゅ♡ あむ♡

ちろちろ♡ れ……っ♡♡ れ……っ♡♡

ぼってりと赤く勃起してしまったそこを柔らかく食まれて、舌で擦るように舐められて。アイスクリームを舐めるみたいに何度もぬるついた舌で往復されて、腰がへこへこ♡と揺れ始めてしまう。

(何これ、ちがうのにっ♡ あ、あたしがもっと……上手に、昂のこと、リードするんだっ
た、のに♡♡ おっぱい舐められると、腰じんじんして疼いちゃう♡ あ、昂の唇、近付
いて……また、くる……っ♡)

ちゅぽ♡ ちゅ……っぽ♡

くりくり♡ カリカリカリカリ……♡

片方は何度も甘く吸われて、もう片方は爪先でやさしく弾かれて快楽に頭がはじける。

「あ、あぁっ♡ つうう、んんっ、ぐぐぐ……っ♡」

「声我慢すんなんて、聞きてえから……なあ、どっちのが気持ちいい？ 教えてくれるんだ
ろ？」

「やあ、あ♡ そ……そんなの、わ、わかんないってば……っあぁ!♡♡ まって、どっち

も、だめええ……っ♡」

れろれろろ♡

カリカリカリ♡♡

答えた瞬間に両方されてしまつて快感に引きつった声が出る。だんだんと頭がぼーっとしてきて、気持ちいい♡ でいっぱいになってきてしまった。

「あ、ん、んん……♡ あっ♡ すば、昂う……♡♡♡」

「すっげえ甘い声……どっちか気持ちいいか、わかった？」

「へ、あ……？♡ んん、どっち、どっちも♡ きもち、い、っあっ、ああ……っ♡♡」

くにくにくに♡ かしかしかしっ♡

ちゅぽ♡ ちゅぽっ♡ れろれろろ♡

答えた途端に両方とも激しく責められ、快感で頭がちかちかする。

緊張であまり濡れないだろうと思っていたおまんこから、ゼリーを押し上げて愛液が溢れる。じゅわ……♡ とパンツが濡れてしまったのがわかった。

「なあ、さっきから足すりすりしてんのエロいんだけど……こっちも触っていい？」

「あつ、え……！？　そ、そこは……触んなくても、って、ちょ、だ、ダメっ……！」

するすると腰紐を外され、バスローブをはだけさせられる。昴の身体があるせいで足は開きっぱなしで、濡れたところを見られてしまった。

昴は、どこか嬉しそうな表情をしている。

「……リコ、濡れてる」

「やつ……い、言わないでよお……！　ちょ、っと昴、あつ、んん……っ♡　くっつなでるの、だめっ……♡」

「すげーぬるぬる……割れ目んとこ、指でなぞるの気持ちいい？　腰へこへこしてエロすぎ、うわ、クリの形めっちゃわかる……」

ぬるくっ♡

すりすりすり♡　カリカリカリ♡♡

おまんこの形を確かめるように指を行き来されて、見つけられてしまったクリトリスを爪先で弾かれる。乳首とは比にならない直接的な快感に抵抗することができない。

（ううっ、違うのに♡ ほんとにこんなに濡れてるわけじゃないのに♡ ぬるぬるの指でおまんこ撫でられると気持ち良くて♡ あっ、クリカリカリするののため、訳わかんなくなっちゃうよお♡♡）

「リコのクリ、勃起してきた？ すげー可愛い、触って欲しいんだな……強くするのより、これくらい弱く擦る方がビクビクして嬉しそ……」

「ひっ、あ、ああっ♡♡ うううっ、よわいの、だめ……っくう♡♡ も、あ、あっ♡♡ こんなの、いいってえ……っ♡」

「俺がしてえんだって。リコが気持ち良くなるとこ、全部教えろよ。これは？ ビンビンのクリの先っぽ、爪先でカリカリすんの……」

「ああっ♡♡ だめ、あ、ひっ♡♡ すばる、だめそれ、きもち……っよすぎ、てえ……♡」

ぞくぞくと絶頂感が押し寄せてしまっただベッドの上にずり上がって逃げようとする。け

れど空いた片腕で簡単に戻されて、逃げんな、って言うみたいに唇へと甘く噛みつかれる。

「んうう……っ♡　　っ、ぷは……は、ひ……っ♡」

「なんで逃げんだよ、リコが気持ち良くなってるってこ見てえのに」

「ううっ……♡　ちが、……あ、あたし……イっちゃいそう、だから……っひい!?♡　ま、
まって、あぁあっ♡」

カリカリカリ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅ♡　カシカシカシっ♡

先ほどよりも激しく動かされて腰が浮く。缢るものがほしくて両手とも昴の背中に回したら、嬉しそうにまたキスをされた。

「そんな感じてくれんの、すげえ嬉しい……俺の手でイクリコ、見せて」

「やあ、あっ♡　恥ずかし、あっ♡　だめ、そこばっか、あぁっ♡」

（昴、ずっと興奮したみたい私のこと見てる♡　どこがいいのか全部バレちゃってるの恥

ずかしいよお…♡♡ あっ、ダメ、ずっとカリカリされて♡ 無理やりじゃなくて、いくタイミング待たれてるみたいなの…っあ、あ、やば、いく、イっちゃう…♡)

カリカリカリカリ…♡

止まることのない刺激にぐぐぐっ♡ と背中が仰け反っていく。もうダメ、と思った時にはもうびくんっ♡ と大きく腰が跳ねていた。

「あっ、ああっ♡ だめ、昂う、いく、イ…つくう、うあっ、ぐぐぐっ♡♡」

びくびく、びくんっ♡ と身体ごと跳ねてしまう。身体に突き刺さるような強い絶頂感に脳が妬かれる。

気持ちいいでいっぱいになって、意識がふわふわと混濁していく。

「リコ……マジで可愛い、クリ好きなんだな……なあ、もっと触っていい？ 次は直接触りたい……」

「はっ、はっ、ふ……んえ、なに…えっ？ ちょ、直接…!？」

余韻に浸っていると、何度も顔にキスを落としながら濡れそぼったパンツに手をかけられる。逃げたくてもいったばかりで身体が思うように動かない。ろくな抵抗もできずにいとも簡単に足から抜かれてしまった。

「ねえ、も、もういいってば、もう準備できて……ちよつと、聞いてる……っ？」
「……リコ」

昴の顔が見えなくなる。ずり下がってお腹あたりを確かめるように撫でながら、すん、と匂いを嗅ぐ音がした。

……え？

「なんか、甘い匂いする……なんで？　なんか塗った？」
「はっ……！？」　ちが、待つ、ちよつとやめ、くくっひ……っ！♡」

必死に逃げようとするものの叶わず、ぐっと太ももの裏を持ち上げられ、思い切り足を

開かせられる。

あ、あたしがリードする予定だったから、バレないと思ってたのに……!!

「……ここから、だよな？ この、ぬるぬるのまんこ。なあ、何かしただろ？」

「……っうう……その、ぬ、濡れなかったら、って思ってたえ……っ」

「んだよ……そんなん、しなくていいのに。けどすげー甘い匂いして美味そ……」

恥ずかしい、恥ずかしすぎる。足を閉じたいけど昴が足の間に入っておまんこを凝視しているからどうしようもない。

早くこの時間が終わらないかと願っていると、むにゅ……っ♡ と、おまんこの肉を押さえて割り開かれる。やめてって言おうとして顔を上げた瞬間、ちろ……♡ と、ぬるついた感覚が襲って思い切り身体が仰け反った。

「へ……!? ちょ、昴、っああっ♡ やあ、まって、舐めちゃだめええ……っ♡」

ちゅう♡
れろれろれろ♡

ぬりゅぬりゅぬりゅ……っ♡

イきたてのおまんこを舌で舐められる♡ さっき入れたばかりのゼリーを奥からかき出すみたいぬりゅうう……っ♡ と舌を入れられて、内壁を何度も行き来される。

「ん……甘くてうまいけど、奥のほうはリコの本気のマン汁の味する」

「ばっ、何味わって……ひいっ♡ あ、あぁ……っ♡ これ、だめっ、すばるう♡」

（うう♡ そんなにおまんこ舐め回しちゃダメなのに、全然やめてくれない……っ♡♡ あ♡ ぬるぬるのクリ舐め上げられて……っ吸われ、てる……っ♡♡ イったばかりなのに♡ ました気持ちいいの、きちゃうよお……♡♡）

ぬりゅりゅ……っ♡ れろろ……っ♡

ちゅぽっ♡ ちゅぽっ♡ ちゅ……っぽ♡

気持ちよさで頭がバカになってくる。へこへここと浅ましく揺れる腰は昂の逞しい二の腕でがっちりと押さえられてしまった。

「ふ……すげえな、リコのまんこ、クリ吸う度にとぶとぶマン汁溢れてくる。こんな溢れてくるのに、濡れねえ心配してたんだ……？」

「ああ、ううつ♡ だって、こんな♡ ちがう、のにい……♡ あ、あたしが……っんあ、あっ♡ りーどする、からあ……！」

「そんなんされるよりお前がヨがっつてるとこ見てえけど、俺」

ずぼずぼずぼ♡

ぬりゆりゆ♡ ぬりゆりゆ♡♡♡

快感の余韻から降りられないままおまんこの浅いところを舌で出し入れされる。もうほとんどゼリーは舐め取られてしまつて、愛液でべたべたになつてしまつた。

開いた足がぶるぶると震える。このままだとまたすぐイきそうなのに、堪えられそうにない。

「ひ、あ、あゝゝゝ……っ♡ すばるう♡ だめ、あたし、っあ、またあ……♡」

「ん……またイきそ？」

「ん、ん♡ イきそ、だから……も、いいからあ……っ、も、すばるの、入れてよお……！」

許容範囲の超えた快感にほとんど泣きじゃくるみたいに言う。昴との思い出が欲しいだけだったのに、自分ばかりどろどろに蕩かされてしまって情けない。それなのに。

「まだダメ、リコ痛がらせたら嫌だし」

「そんなの平気、だってば……いい、いれたこと、あるし……っ！　だから、早く……っ」

早く、昴にも気持ちよくなってほしい。

そう思う一心なのに、顔を上げた昴は不機嫌丸出しで、眉根を寄せながら私を見ていた。

「……俺としてんのに、前のこと考える余裕あんのかよ」

低く呟かれる言葉に焦る間もなく、ぬる……っ♡　と、クリトリスを舐め上げられて頭に電流が走る。


~~~~っ♡♡

れろろ♡

ぬりゅぬりゅ♡ ぬりゅう…っ♡

送り込まれる快感に耐えきれず、びくびくっ♡ と身体が弾けて、さっきよりも激しく  
イってしまった♡

「は、ひ…っ、は…、…あっ!?!♡ やだ、まって、まってっばあ!♡」

ぐちゅ…っ♡

いったばかりでまだヒクつくおまんこに指を入れられて驚いて腰がビクつく。  
どこか余裕なく進められる指先が怖くなってしまっ、ぐずりと鼻が鳴る。  
こわい。もう、これ以上しないでほしい。

「痛えの?」

「ちが、うけど…っも、だめ、ゆび…ぬいてっ、ばあ…!」

「なんで？ 入れたこと、あんだろ。今みたいここに、ぐちゃぐちゃにされてたんだろ？」

昴、明らかに怒ってる。

それなのに私をもっと気持ち良くしようとする手は止めてくれない。ぐちゅ…つと奥まで指を進めて、お腹側の弱いところに触れられる。

無理やり高められる性感に気持ちよさより先に恐ろしさが勝って、涙がぼろぼろと溢れる。

ダメだ。

もう——嘘、つけない。

「う、うう……っちがう、もん…こんなの、されたことないっ、ほ、ほんとほ、あたし…っ、はじめて、だからあ…！」

「……は？」

「嘘ついたのっ、はじめてなの、ほんとほ……っだから、優しくしてよお……ッ」

情けない。

こんな予定じゃなかったのに、全部台無しだ。

嘘ついて誘ったのにうまく出来もしなくて、こんな女、絶対面倒くさい。

「……リコ」

優しい声が響く。

ゆっくりと指が抜かれた。涙でぐしゃぐしゃの視界が急に昂でいっぱいになって、数秒遅れて抱き上げられたことを理解する。

胡座をかいた昂の膝に座らされて、優しく背中を撫でられた。

「……ごめん、怖かったな。なんだよ……そんな嘘つかなくてよかったのに」

「ぐうっ……だ、だって、初めてなんて、めんどくさいと思ってえ……っ」

「めんどくさい訳ねえだろ。嬉しいに決まってる、俺に初めてくれようとしたってことだよな？」

どこか浮き足立った様子の昴が額をこつんとくつつけてくる。

嫌がられてなくて良かった、と安心する気持ちがじわじわと滲んできて、自分からも肩へ腕を回した。

「ごめんな、酷くして。リコが他の男とやってるって思ったら、すげえムカついて……俺、ずっとリコのこと好きだったから」

「……へ……っ？」

照れながらも、まっすぐ見つめる視線。

私の好きな、偽りのない目。

——青天の霹靂とは、こういうことを言うのだろうか。

頭より先に気持ちちが理解したようで、止まりかけた涙がまた溢れ出した。

「す…好き……あ、あたしを……っ？」

「そうだよ。好きじゃねえ奴とホテル行くわけねえだろ」

「だっ…て、全然…興味なさそうだったじゃん、昴……！」

恋愛の話とか振っても、ふーん

しか言わないし……っ」

「それは……お前が彼女作らねえのかとか、彼氏欲しいとか言うからムカついてた。俺の事興味ねえじゃんって」

「ええ……？　じゃ、じゃあ、合コン行ったのは？」

「リコに変な男が言い寄ったら邪魔してやろうと思って」

何それ、じゃあ私、めちゃくちゃ勘違いしてたってこと……？

昂は涙が止まらない私の頬を飽きることなく拭ってくれる。こつんと額を合わせて、どこか期待した瞳が私を見る。

「なあ、初めてくれるってことはさ。俺、脈アリ？」

「脈アリ、っていうか……あ、あたしだって……好きじゃない人、ホテルに誘わないし……！」  
「……マジで？」

嬉しそうに何度もキスをしてくる昂に肩の力が抜ける。

変な遠回りして、あんな情けないところまで見せたのに、変わらずに接してくれる昂の

ことが、やっぱり好きだ。

「……あたしも……好きだよ、昴。ずっとずっと前から…昴のこと、好きだった……っ」

俺も、と囁く声に胸がじんわりと暖かくなる。

さっきとは違うあったかい涙が出てくる。変わら拭ってくれる昴に、もっとくつつきたくなって、その手を握る。

昴は、指同士を絡めてぎゅうっと握り返してくれた。

その日はもうくたくたになってしまっていた私に、次は優しくするから、最後までさせてと言われて。

頷いて、その日は身を寄せ合って眠った。